

2018 Vol.7
Border Crossings
The Journal of Japanese-Language Literature Studies

跨境 第7号 日本語文学研究

エッセイ 跨境の言葉

リービ英雄 「島国と大陸」の覚え書き
伊藤 亜人 我々の研究とは交流にほかならない

特集: 東南アジアと日本語文学

Nguyen Vu Quynh Nhu ベトナム人と俳句
阮文雅 「昭南」の女の記号性
Rouli Esther Pasaribu 円地文子の『小町変相』とテュティ・ヘラティの『チャロン・アラン: 家父長制度の犠牲者である女性の物語』
アントニウス・ブジョ 神保光太郎の『南方詩集』における作家の展望と真相
Nguyen Anh Tuan Translations and studies of Japanese literature in Vietnam
ナムティップ・メータセート タイにおける日本文学の受容
中野綾子 蔵書構築からみる日本近代文学研究の姿

一般論文

尹小娟 佐多稲子の戦中と戦後
王占一 柴田天馬と『聊齋志異』
黄佳慧 近世初期における詩題俳諧の発端

研究資料

朴光賢 戦後の「在朝日本人」の記憶とは? その問いから始まる挑戦
史瑞雪 謝六逸の「文学史」著述の日本語材料について
和泉司 「田郷虎雄日記」—1940(昭和15)年・前半(1月~6月)分の翻刻と解題
呉念聖 呉朗西と文化生活出版社
李志炯 共同研究<不穏な身体、疎外された文学—韓国と日本の身体疎外叙事の系譜>について

書評

金ヨロン 坪井秀人編『東アジアの中の戦後日本』
祝然 単援朝著『海を渡った日本文学』
内田康 リチャード・フラナガン著/渡辺佐智江訳『奥のほそ道』
姜宇源庸 跨境日本語文学・文化研究会 巖仁卿編著『東アジアの日本語文学と集団の記憶、個人の記憶』
李漢正 跨境日本語文学・文化研究会 金孝順編著『東アジアの日本語文学と文化の翻訳、翻訳の文化』

Border Crossings: The Journal of Japanese-Language Literature Studies
Vol. 7

Essays-The Words of Border Crossings

Hideo LEVY The Note on 'the Island Country and Continent'

Abito ITO Our Research is no other than Communication

Special Issue

Southeast Asia and Japanese-Language Literature

Vu Quynh Nhu NGUYEN Vietnamese and Haiku

Uen-la JUAN Symbolization of Shonan's Woman: Yagi Yoshinori's "Woman" Research

Rouli Esther PASARIBU Enchi Fumiko's Komachi Hensoo and Toeti Heraty's Calon Arang: Kisah Perempuan Korban Patriarki: The Recreation of Myth from Woman's Perspective

Antonius R. Pujo PURNOMO Jimbo Kotaro's Poems Collection Nanpo Shishu: The Author's Perspective and Reality

Anh Tuan NGUYEN Translations and studies of Japanese literature in Vietnam

Namthip METHASATE The Reception of Japanese Literature in Thailand: Focusing on the Case Study of Ryunosuke Akutagawa's literary works

Ayako NAKANO The Study of Japanese Modern Literature from the Construction of bibliotheca

Articles

Xiaojuan YIN Sata Ineko's Wartime and Postwar: A Research on Consolatory Visit of the South Seas

Zhanyi WANG Analysis of the nationality of Chinese based on the Ruby and Annotation of *Strange Stories from a Chinese Studio* translated by Shibata Temma

Chiahui HUANG The Beginning of the Topic of Poem in the Early Edo Period

Research Materials

Kwanghyoun PARK The Experience and Memory of Post-War Repatriated Japanese about the Colonized Korea

Ruixue SHI Sha Rokuitsu's Japanese Materials in the Writing of The History of Literature

Tsukasa IZUMI The Transcription and Bibliographical Note on *Toraō Tago's Diary* in 1940.1~6.

Niansheng WU Wu Langxi and Bunkaseikatsu Publishing: Focusing on The Translation Publication of Japanese Literature

Jeehyung LEE Joint research <Disquieting Bodies, Alienated Literature:Genealogy of the Narrative on Alienated Bodies in Modern Korea and Japan>

Book Review

Younglong KIM / Ran ZHU / Yasushi UCHIDA / Wonyoung KANGWOO / Hanjung LEE

エッセイ—**跨境の言葉**

- 4 「島国と大陸」の覚え書き __ リービ英雄
6 我々の研究とは交流にほかならない __ 伊藤亜人

特集：東南アジアと日本語文学

- 11 ベトナム人と俳句 __ Nguyen Vu Quynh Nhu
31 「昭南」の女の記号性
—八木義徳「女」試論 __ 阮文雅
45 円地文子の『小町変相』とテュティ・ヘラティの『チャロン・アラン』
：家父長制度の犠牲者である女性の物語』
—女性の視点における伝説の語りなおし __ Rouli Esther Pasaribu
59 神保光太郎の『南方詩集』における作家の展望と真相 __ アントニウス・ブジョ
69 Translations and studies of Japanese literature in Vietnam
__ Nguyen Anh Tuan
113 タイにおける日本文学の受容
—芥川文学の事例を中心に __ ナムティップ・メータセート
131 蔵書構築からみる日本近代文学研究の姿
—ベトナム社会科学院所蔵旧フランス極東学院日本語資料(洋装本)から __ 中野綾子

一般論文

- 149 佐多稲子の戦中と戦後
—南方慰問をめぐる一考察 __ 尹小娟
167 柴田天馬と『聊斎志異』
—天馬訳『聊斎志異』のルビと訳注に注目して __ 王占一
185 近世初期における詩題俳諧の発端
—『みなし栗』から『あら野』へ __ 黄佳慧

研究資料

- 201 戦後の「在朝日本人」の記憶とは？その問いから始まる挑戦 __ 朴光賢
208 謝六逸の「文学史」著述の日本語材料について __ 史瑞雪
213 「田郷虎雄日記」
—1940(昭和15)年・前半(1月～6月)分の翻刻と解題 __ 和泉司
261 呉朗西と文化生活出版社
—日本文学の翻訳出版を中心に __ 呉念聖
269 共同研究<不穏な身体、疎外された文学—韓国と日本の身体疎外叙事の系譜>
について __ 李志炯

書評

- 276 坪井秀人編『東アジアの中の戦後日本』(臨川書店, 2018) __ 金ヨンロン
278 単援朝著『海を渡った日本文学』(社会科学文献出版社, 2016) __ 祝然
280 リチャード・フラナガン著／渡辺佐智江訳『奥のほそ道』(白水社, 2018) __ 内田康
282 跨境日本語文学・文化研究会 巖仁卿編著
『東アジアの日本語文学と集団の記憶、個人の記憶』(亦樂, 2018) __ 姜宇源庸
284 跨境日本語文学・文化研究会 金孝順編著
『東アジアの日本語文学と文化の翻訳、翻訳の文化』(亦樂, 2018) __ 李漢正

- 286 『跨境/日本語文学研究』編集委員会規定
287 『跨境/日本語文学研究』査読規定
288 『跨境/日本語文学研究』研究倫理規定
290 『跨境/日本語文学研究』論文投稿規定
291 『跨境/日本語文学研究』原稿作成要領
293 『跨境/日本語文学研究』原稿作成例示
296 『跨境/日本語文学研究』編集委員及び査読委員の名簿

近世初期における詩題俳諧の発端

——『みなし栗』から『あら野』へ

黄佳慧

✉ koukae74@gmail.com

As Chinese poetry gained popularity in literary circles in the Early Edo Period, Matsuo Bashō began to compose Chinese poetry-based *haikai* (*shidai haikai*), eventually including them in *Minashikuri*. However, *Minashikuri*, including Bashō's *shidai haikai*, tended to follow the trends of Chinese poetry. *Arano*, highly regarded as one of Bashō's key *haikai*, was published after *Minashikuri*. The *shidai haikai* in *Arano* not only followed Chinese poetic styles and trends but also attempted to develop or translate Chinese poetic content. This development introduced new avenues in the compositions of *shidai haikai*. The present study explores the origins of Chinese poetry-based *haikai* in the Early Edo Period. Despite its limitations, it is hoped that this research serves to clarify the structure of *shidai haikai*.

Keywords *shidai haikai*(詩題俳諧), Matsuo Bashō and his Pupils(松尾芭蕉と蕉門), *Minashikuri* (『みなし栗』), *Arano*(『あら野』)

1 はじめに

本論は、近世初期における、漢詩を題とした俳諧の発端を明らかにしようとするものである。筆者はこれまで漢詩を借用する近世前期の俳諧を検討した際、天和年間に「天和調」という漢詩文調俳諧が流行した如く、漢詩は単なる素材として用いられているのみならず、近世前期における俳諧に新風を吹き込み、俳諧の傾向という方向性にまで強く影響を与えているとの見解を得た。さらに蕉門内部にも、漢詩によって、新しい俳諧を詠もうするという動きが見られる。芭蕉が活躍する以前から流行していた貞門・談林俳諧、及び芭蕉とその周辺が詠んだ俳諧を調査した結果、俳諧における漢詩の利用法（漢詩の引用は除く）として、拙稿¹で考察してきたように、主に次の三点を挙げることが出来る。

一点目は、テーマに従って自作の漢詩と俳諧を詠みあげること。その初出は、天和二(1682)年に刊行された『松島眺望集』の中に、このような形式で詠まれた俳諧が多数見られる。

二点目は、中世公家社会で流行していた連歌の一形式「和漢聯句」の形式を模倣して、漢詩と俳諧を交差的に詠み歌仙をなす「和漢連句」という俳諧である。永禄十一(1568)年から、すでにこの形式の俳諧が詠まれていることが確認できる²。俳壇では元禄五(1692)年に芭蕉と素堂が詠んだ和漢歌仙(『三日月日記』所収)も、この形式の有名な歌仙の一つである。

三点目は、漢詩の詩句を俳諧の題にして、発句を詠むこと。この初出は、池西言水編『東日記』(延宝九(1681)年刊)に、このような形式で詠まれた芭蕉の発句を見出せるが、天和三(1683)年に刊行された『みなし栗』にさらに多く見られる。筆者は漢詩を題としたこの分野の発句を、便宜上「詩題俳諧」と総称する。

以上の三点は日本近世の天和調が流行している時期に生まれた俳諧の諸形式であるが、一点目の分野は、近世中期ごろ衰退して、後期では確認できたものが少ない³。二点目の「和漢連句」は儒学者や詩壇では広く愛好されているが⁴、俳壇では関東俳諧で一部見られるものの⁵、近世後期には、俳諧分野において広く行われていたとは考え難い。これに対して、三点目の詩題俳諧は、蕉門を中心に受け継がれ、近世後期まで発展していった。これは近世期における漢詩の流行の在り方とも関係していると考えられるが、

1 「近世前期における俳諧流行の発端：越人編『鵲尾冠』・『庭竈集』に収録した「詩題俳諧」を中心に」(『日本語日本文学』(ACI), 第44輯, 2015.11), pp.26-47.

2 策彦・白(道澄)・紹巴等「永禄十一年十二月二十五日策彦・白等漢和聯句」, 松字文庫蔵.

3 近世後期の文化九(1812)年の菊舎尼編の『手折菊』(『日本文学Web図書館』『和歌&俳諧ライブラリー』)以外、ほかの俳書ではあまり見出せない。

4 例えば、林永喜・応昌・久我敦通・林羅山・大圭等「元和九年三月永喜応昌等漢和聯句」、鍋島直藤・鍋島直郷・昌春等「宝暦九年十一月廿五日漢和聯句」、秀実・鍋島直郷等「享保十九年十一月廿五日漢和聯句」等がある。

5 例えば、如鏡編『江府諸社 俳諧たま尽し』(宝暦六(1756)年刊)で「和漢連句」が確認できる。(本文は加藤定彦・外村展子編『関東俳諧叢書 第十巻 江戸編②』(関東俳諧叢書刊行会(1997), 青裳堂書店)を参照。)

いずれも近世期全般にわたり流行し続けた詩題俳諧が、俳壇に与えた影響は少なからぬものがあり、無視できないものがある。筆者は、本論を通して、近世初期における詩題俳諧の特徴に着目することにより、解釈と補足を加えると共に、その発端及びその展開が図られた一端について究明する。

2 「天和調」時期における俳壇の漢詩文調の流行

芭蕉が東下した後の延宝元(1673)年ごろより、徐々に江戸蕉門が形成されたと考えられる。延宝八(1680)年の冬、芭蕉が深川に移居し、杜甫や李白などの詩人の心境に倣い⁶、清貧生活を自得し、漢詩文を通して新風を確立しようと図ったことは、石川真弘氏が指摘している⁷。後に、嵐雪、杉風などと併称される其角が、天和三(1683)年に『みなし栗』を編纂して、蕉門の第一人者として一目置かれるようになり、江戸蕉門の発展及び初期蕉風俳諧の生成に至ったことも、すでに明らかにされている⁸。

漢詩を題として詠ずることを考えるようになったのも、このような背景の中で発展したものであろうと推量する。延宝八(1680)年四月に刊行された『桃青門弟独吟廿歌仙』と同年の六月嵐雪序「田舎之句合」の句の中に、漢詩を題として詠ずる端緒が見られることは、稲葉有祐氏が『『みなしぐり』再考—方法としての追和と唱和—』において指摘した⁹。特に、嵐雪が「田舎之句合」序文において、「遠くきく、大江の千里八百首の詠を詩の題にならひ、近所の其角ハ俳諧に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なる事を知ル」¹⁰と記したように、漢詩句を題にして和歌を詠んだ大江千里¹¹に倣い、俳諧でも漢詩を題に

6 芭蕉「真跡懐紙」天和元(1681)年(冬)。以下、原文を引用。

「泊船堂主」華桃青
窓含西嶺千秋雪
門泊東海万里船

我其句を職て、其心ヲ見ず。その侘をはかりて、其楽をしらず。唯、老杜にまされる物は独多病のみ。閑素茅舎の芭蕉にかくれて、自乞食の翁とよぶ。

櫓声波を打てはらわた氷る夜や涙
貧山の釜霜に鳴声寒シ
買レ水

氷にがく偃鼠が咽をうるほせり

歳暮

暮々てもちを木玉の侘寝哉(井本農一・堀信夫校注『古典俳文学大系・第五卷・芭蕉集』「俳文編」(集英社、1970))

7 石川真弘「江戸俳壇—其角・嵐雪など—」『講座元禄の文学第三巻・元禄文学の開花II—芭蕉と元禄の俳諧』(勉誠社、1992)、p.306。

8 蕉風の生成について、佐藤勝明『芭蕉と京都俳壇—蕉風胎動の延宝・天和期を考える—』(八木書店、2006)を参照されたい。

9 稲葉有祐『『みなしぐり』再考—方法としての追和と唱和—』(『立教大学日本文学』98号、2007)、pp.59-71。

10 其角編「田舎之句合」(延宝八(1758)年嵐雪序)、本文は松宇文庫蔵、国文学研究資料館紙焼資料。

11 大江千里、生年不詳、平安時代前期歌人・儒者。家集の『句題和歌』(『千里集』)は宇多天皇の勅命により撰集・献上されたもので、その序文の日付は寛平(894)年四月二十五日とあり、漢詩句とそれを題として詠じた

して詠む方法を応用し始めた当時俳壇の現象も、稲葉氏が同論で明らかにした。同氏はさらに、同時代の俳人が漢詩句や漢詩人に唱和するうえで、当時江戸文壇において唱酬や贈答の応酬が流行していたという時代背景のもとに、漢詩や詩人を題として詠ずる俳諧が流行したのであらうと指摘している¹²。

その上、延宝八(1680)年の冬、芭蕉が深川に移居した後¹³、(宋)汪革の「富家^{クワ}嶮^ヒ肌^ニ肉^ヲ、丈夫^ハ喫^ス菜^ニ根^ヲ」^{※「一」は訓読の読み順の数字}を踏まえて、「雪の朝独り干鮭を囓得たり 桃青」¹⁴という発句があり、漢詩を題にして歌仙や句合を成すのではなく、独立した発句を詠み始めた例が散見される。その後、『俳諧次韻』(延宝九、天和元(1681)年)より擬漢詩文句体¹⁵が詠まれるようになり、擬漢詩文句体や破調体などという天和調俳諧の最盛期を迎えた。

『みなし栗』(天和三(1683)年版)もこの時代背景の中で編集された一冊であり、芭蕉がその跋文に記したように、『みなし栗』には四つの味わうべき点がある。それは、「①李白、杜甫の漢詩的風趣、②寒山詩の禅味、③西行歌の侘びと風雅、④楽天の恋の情味」であると石川八朗氏は指摘した¹⁶。また、先行研究で述べられてきたように、「天和調」は「漢詩文調」、「虚栗調」とも言い、「みなし栗」とは漢詩文を基調にする俳諧の代表とされる¹⁷。このような時代背景の中では、漢詩的風趣な俳諧の発展は言うまでもなく、漢詩を題とした歌仙や発句の創出も自然なことと言える。

詩題俳諧の作品も収めた七部集の第三部・『あら野』¹⁸について、芭蕉がその序文(元禄二(1689)年)で、次のように述べている。

「尾陽蓬左、樞木堂主人荷兮子、集を編て名をあらのとていふ。(中略)いとていふの
いとかすかなる心のはしの、有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにともつかず、雲
雀の天空にはなれて、無景のきはまりなき、道芝のみちしるべせむと此野の原の野
守とはなれるべらし」¹⁹

和歌の交互に出現する句題和歌の形式を取っている撰集である。(平野由紀子執筆(2014)『和歌文学大辞典』「千里集」(「日本文学Web図書館」「和歌&俳諧ライブラリー」))。

¹² 注9に同じ。

¹³ 石川八朗『「次韻」から『みなし栗』へ』、前掲書(注7)、p.60。

¹⁴ 池西言水編『東日記』(延宝九年(1681)刊)。本文は綿屋文庫蔵(天理図書館綿屋文庫俳書集成編集委員会『談林俳書集 四』(八木書店、1998)、以下同)。

¹⁵ 以下、原文を引用する：

「鶯の足雄脛長く継添て 桃青

這句以_レ莊子_ニ可_レ見矣 其角

禅骨の力たは_レはに成までに 才丸

(以上、前掲注(6)『古典俳文学大系 第五卷 芭蕉集』「連句編」)

¹⁶ 注13に同じ、p.67。

¹⁷ 井本農一・尾形尙・島津忠夫・大岡信共編『俳文学大辞典』(角川書店、1995年)。

¹⁸ 荷兮編、元禄二(1689)年序。上巻、下巻、員外という三冊になっている。題簽には「阿羅野」、「菴蘿野」、「あらの」の三種の標記、内題には「曠野」、「荒野」の二種の表記がある。高橋庄次稿『「あら野」をめぐる問題』(『文学』、41号、1973、pp.29-51)では、題簽の「阿羅野」、「菴蘿野」、「あらの」という標記は漢字で仮名を表示することで意味が読み取れず、内題の「曠野」、「荒野」という表記はいずれも意味が偏って妥当性を欠くことから、「あら野」という表記にしたという。本論は高橋氏の見解に従うこととする。

荷兮が編集したこの『あら野』は、俳諧の外形と内実を表現するうえで、荒野で途方に暮れるように、未知の文芸に彷徨っている人々に対する案内書であり、荷兮がその番人となってくれた、と述べる。すなわち、この作品は、俳諧の新しい境地への道標を示そうとする意欲作であることを意味している。よって、『あら野』で詠まれた詩題俳諧はさらにその俳諧の新しさを示す一例とも考えられる。

3 『みなし栗』にみる詩題俳諧の形成

前述したように、漢詩を発句の題にして詠み始めた俳諧師は芭蕉であり、その後、天和調俳諧が隆盛していく中で、『次韻』から『みなし栗』を経て、『あら野』に至って、漢詩を題とした俳諧という形式が定着するようになったと考える。

そこで、以下、漢詩を発句の題にして詠んだ芭蕉の発句を次のように振り返ってみたい。

- ① 「富家^{フツカ}ハ^ハ喉^{ノド}ヒ^ニ肌^{ハダ}-肉^{ニク}ヲ^シ、丈夫^{ツブサ}ハ^ハ喫^クス^ニ菜^{サイ}-根^ネヲ^シ」^{※「-」は訓読の読み順の数字} 予ハ乏^ツシ、
雪の朝^{ユキノアサ}独^{ヒト}リ干^カ鮭^{サケ}を^シ嚙^ク得^ルタリ 桃青 (『東日記』)
- ② 憂^{ウレ}テハ方^{カタ}ニ知^チリ^ニ酒^{サケ}ノ聖^{セイ}ヲ^シ
貧^ヒシテハ始^{ハジ}テ覚^{サト}ル^ニ錢^{ゼン}ノ神^{カミ}ヲ^シ 20
花^{ハナ}にう^ウき世^ヨ我^ガ酒^{サケ}白^{シロ}く食^ク黒^{クロ}し 芭蕉 (『みなし栗』²¹)

①の原詩では、裕福な人は肉類を食らい、ますらおは野菜の根という粗食生活を送るという。芭蕉はこの漢詩句を発句の題にし、貧乏な俳諧師として、雪の朝に一人で干鮭を噛みしめていることを詠み、詩句の情に響き合わせている。そして、②では『白氏文集』の詩句における、憂いを感じて初めて酒の清らかさ、尊さを知り、貧乏になってから金銭のありがたさを覚えたという部分を引用している。これに対して、花の下に浮世を憂い、濁り酒と粗食を食うばかりという心境を表す発句を詠み、漢詩句に呼応している。芭蕉がこの時期に詠んだ発句における詩題の踏まえ方は、どちらも漢詩句における清貧なる心境に対して「同情」という方法で「個人の心情」を中心に表現している傾向が強いと見て取れる。

次に『みなし栗』の編者・其角が詠み、同じく『白氏文集』の詩句を題とした発句に目を向ける。

19 原文は愛知県立大学図書館貴重書コレクションに拠る。以下同じ。

20 『白氏長慶集』(明暦三(1657)年刊)卷十七「江南謫居十韻」。(長澤規矩也編『和刻本漢詩集成 第九輯』(汲古書院、1974))。

21 天和三(1683)年跋、愛知県立大学図書館貴重書コレクションに拠る。以下同じ。

- ③ 何^{ナニ}故^{ナニ} 溪^{カキ}辺^ヘ 双^{フタ}白^{シロ}鷺^{サギ}
 无^{ナシ}キ^シ 憂^{ウレ}ハ^ハ頭^{カビ}上^ノニ^ニモ^モ赤^{アカ}ク^ク垂^{ツル}ル^ル糸^{イト}ヲ^ヲ
 髪^{カミ}あ^あら^らふ^ふ鷺^{サギ}芹^{セリ}と^とか^かす^す沢^{サハ}辺^ヘ哉^カ 其^{ソノ}角^{ツノ}
- ④ 惜^{オシ}テ^テ花^{ハナ}ヲ^ヲ不^スレ^レ払^{ハラ}ハ^ハ地^チヲ^ヲ
 我^{ワガ}僕^{ボク}²² 落^{オチ}花^{バナ}に^ニ朝^{アサ}寝^ネゆ^ゆる^るし^しけ^けり^り 其^{ソノ}角^{ツノ}

③の原詩では、何がゆえに谷川のほとりに二羽の白い鷺がいるのか、憂いがないのに頭の上にまた白い糸が垂れているという。其角はこれを題にして、白い髪を洗う鷺は沢の辺で白芹を梳るように見えると詠んだ。『俳諧類船集』²³を確認すればわかるように、「白鷺」と「沢辺」、「沢」と「鷺」「根芹」は縁語であることから、俳諧の技法を多く生かした上で発句を詠んでいることに気付く。続いて、④の原詩では花を惜しむため地上の落花を掃除しないことに対して、其角は私が落花を惜しむため、召使いの朝寝を許したと詠んだ。この発句は芭蕉と同じく漢詩と「同情」する方法で表現されていると考えられるが、芭蕉のように個人の心情を強く表現した傾向がやや弱くなり、漢詩の心情に唱和する方向へすこし傾いていっている。

また、次のように、杜甫「曲江」における二句を題にした其角の発句もある。

- ⑤ 酒^{サカベ}債^{ヅカ}尋^ヒ常^{トコ}往^クク^ク如^シニ^ニ有^リ
 人^{ヒト}生^ナ七^{シチ}十^{ジュウ}古^コ来^{ライ}稀^ヒナ^リ
 詩^シあ^あき^きん^んど^ど年^{トシ}を^ヲ貪^ヒル^ル酒^{サカ}債^{ヅカ}哉^カ 其^{ソノ}角^{ツノ}

原詩では、酒の借金は行くところあちこちにあるが、七十歳まで生き延びるなんて稀なのだということに対して、其角の発句では、詩を売りものにして生活している俳諧の宗匠が、酒の借金がたまりつつ、一年を無駄に過ごしている様子が描かれている。麦水編の『新みなし栗』『付言みなし栗の訳』²⁴(安永五(1776)年跋)という江戸時代の古注によると、其角の発句は当時の俳門の宗匠²⁵が芸能・学問を伝授すると称しながら、実際は

22 「僕」の用法について、『和漢朗詠集』「落花」とのまのりとのものみやづこ心あらばこの春ばかり朝きよめすな 公忠で見られる。季吟『和漢朗詠集註』寛文十一(1671)年刊(架蔵本)の解説によると、「とのみやづこ」とは主殿づかさの下部伴氏の者であり、「みやづこ」は「御奴」とかけたという。すなわち、奴僕、下僕、家来などを指す。

23 『俳諧類船集』「巻五」「白鷺」項目には「沢辺」があり、「巻六」「沢」項目には「鷺」と「根芹」があり、「巻七」「芹」項目には「鷺」がある(梅盛著、延宝五(1677)年自序、「日本文学Web図書館」「和歌&俳諧ライブラリー」に拠った)。

24 八戸市立図書館蔵、国文学研究資料館公開資料。以下原文引用。
 「詩商人年を貪る酒債哉(中略)此意は今ノ世学者文人と罵り、先王ノ道我ニ有と十面作る人、愚に誤ひ痴に腰を折ツて、只今年の三十日を越ん、来年の糧を求んと、文華を売ツて生を求る詩商人のみ也と云。翁も常に俳門の宗匠とて、伝授らしき事を唱へ、口腹を養ふに恥ツ。角が腹-内を云出るに感じて、終に江戸の宗匠を其角に譲り、世を遁中に遁して辺-国に去らんとす。故に此脇あり。」

25 赤羽学『みなし栗：翻刻と研究』(私家版、1961)は、『随筆百花苑』『年波随草集』に所載した戯詩「題洛中似七賢」(寛永十六(1639)年頃)で言及した「貞徳^カ欲心萬万円、古稀七十不^レ知^レ全^{コトヲ}、黄金用^レ尽^{シテ}教^{コトヲ}ニ^ニ歌学^ヲヲ^ヲ、留^ニ与^{シテ}貴人^ニ貧^ニ不^レ伝^フ」という詩句から、当時俳壇における芸能学問を売る欲心を批判すること

口腹の養いを求めているという事実を批判したものであるという。一方、この句も其角が自己の生活に対して、「年を貪る」(一日中特に何をするでもなく過ごす)ような自嘲の辞であるとも解釈できる²⁶。つまり、其角の発句を検討すると、杜甫の漢詩に共鳴して追和したものでありながら、当時の俳壇の実情を反映しているか、あるいは俳諧宗匠としての自己の在り方を自嘲しているか、という意味合いが汲み取れる。

したがって、これまでのような「同情」の形式を取る漢詩の題とした詠み方は、江戸蕉門を代表する其角によってその詠み方を展開していくとともに、表現の仕方も少しずつ変貌していったと推察される。

4 『あら野』に見る詩題俳諧の展開

俳諧の荒野における道標と評価される『あら野』に見られる詩題俳諧は、むろん『みなし栗』のこれまでの漢詩を題とした発句の特徴を継承している。『あら野』に収録される詩題俳諧の中で検討すべき俳諧は二種類ある。それは、白居易の詩句を題とした野水の「詩題十六句」、及び中国の美人像を詠む詩句を題とした越人の五句である。

ところが、『あら野』の後に、其角編の『焦尾琴』(寛保三(1743)年刊)²⁷にて、中国の詩人の名を取り上げて詠んだ発句もある。『焦尾琴』を一見すれば、「王維 西ノ方まぐるなからん関の月 午寂」とあるように、詩人の名のみ取り上げられているという印象を受ける。しかし、「右詩人の一句をとるゆへに名を題ス」とその最後に記したように、発句における「西ノ方」という表現は明らかに「西出陽關無故人(西のかた陽関を出づれば故人無からん)」²⁸を踏まえていることがわかる。つまり、実際は詩人名を提示して漢詩句を踏まえて詠んだものである。これに限らず、越人が編集した『庭竈集』(享保十三(1728)年刊)にて中国の人名を題にして詩人像を詠んだ発句をいくつも見出すことができる²⁹。

そこで、中国の美人像を詠む漢詩句を題にした越人の発句は、単に漢詩を題とした俳諧に分類するよりは、別の課題—「中国の詩人名を題とした俳諧」—として究明したほうが、整合性があると考え。そのため、本節では『あら野』に収録された野水の「詩題十六句」を中心に検討することとし、越人が中国の美人像を詠む漢詩句を題にした発句を、近世初期における詩題俳諧の発展したものとして位置づけることとする³⁰。

が分かり、其角の詠んだ詩人は貞徳の行為を指しているのではないかと指摘した。「年波隨草集」の本文は森鉄三等編『隨筆百花苑 第五卷』(中央公論社、1982)に拠った。

26 高野実貴雄「趣向と叙景の俳諧表現史Ⅳ」(『浦和論叢』第41号、2009)、pp.105-134。

27 本文は愛知県立大学図書館貴重書コレクションに拠った。

28 本文は国文学研究資料館公開資料である、(宋)于濟・(宋)蔡正孫『聯珠詩格』(正保三(1646))に拠り、傍線部は筆者によるものである。

29 例えば「宋忠臣」の項目に、文天祥を詠む発句—「日月を貫て胸の梅清し 旦千」や謝枋得を詠む「時雨でも松は南八男児哉 旦千」などがある。(藤園堂文庫蔵、国文学研究資料館マイクロ資料)。

30 なお、発句の解釈に関して、野水の「詩題十六句」及び越人が「李夫人」を踏まえて詠んだ発句などは、池澤

(一) 野水の詩題俳諧

さて、白石梯三氏・上野洋三氏校注の『芭蕉七部集』³¹や池澤一郎氏の『『あら野』巻六、野水「詩題十六句」について』³²が明らかにしたように、慈円や定家が白居易の漢詩を題とした『六家集』に収録する「百首和歌」³³の中より、野水は十六題を選出して春・夏・秋・冬というを順番に詠んでいった。取りも直さず、野水の句は、慈円や定家の和歌と白居易の漢詩に唱和する特徴がある。例えば、「今日不知誰計³⁴／春風春水一時³⁵」を題とした野水の第一句目「氷みし添水またなる春の風」は、凍結したししおどしが春の風によってまた動きはじめ、響き出していると詠む。「文集百首」では、「しがのうらやとくる氷の春風に今朝をけふとはいつかつげけん」(慈円『拾玉集』「詠百首和歌」春十五首)³⁴と「氷とくもとの心やかよふらん風にまかする春のかけ氷」(定家『拾遺愚草員外』春十五首)とあるように、氷を解かす春風と春の水を基調とし、漢詩に同調していた。野水の句では「添水」という情景に転じているが、漢詩と和歌で詠まれた、春風が吹くことによって溶けて流れてきた春の水の情景を唱和した³⁵。

これに留まらず、部分的に滑稽さや面白みを取り入れたことは、野水の詩題俳諧において、しばしば散見される。例えば、「微風吹袂衣／不寒復不熱」を詩題とした第六句目に「綿脱は松風聴きに行くころか」とあるように、四月一日の衣替え³⁶の頃は、涼しい松風³⁷の音を聞きに行く時期だと詠んでいる。すなわち、漢詩に見られる微風の快さを

一郎氏の『『あら野』巻六、野水「詩題十六句」について』(『近世文芸研究と評論』75号, 2008, pp.1-24)、及び「発句を書くことの喜び—「文集百首」と野水の「詩題十六句」—」(『国文学研究』157集, 2009, pp.34-42)と「越人風雅」(『近世文芸 研究と評論』77号, 2009, pp.61-71)という論考において、詳しく解説されている。したがって、本論では池澤氏の解釈を踏まえつつ、その特徴を見出し、天和調以降詩題俳諧のさらなる発展を提示する。また、野水の「詩題十六句」で引用した白居易の詩句の中に、『和漢朗詠集』に収録されているものもある。近世初期に俳壇でもよく読まれ、芭蕉と俳諧で密接な交流を持った季吟の『和漢朗詠集註』(前掲注(22))は、当時の俳壇で、白居易の詩句はどのように理解されていたかを知る手がかりを得るうえで参考に値する注釈書である。そこで、漢詩の読み方について、季吟の『和漢朗詠集註』を参照しつつ、漢詩の解釈を行うこととする。

31 『芭蕉七部集』(岩波書店, 1990), pp.131-135.

32 前掲注(31)『近世文芸研究と評論』75号.

33 「百首和歌」は慈円の『拾玉集』と定家の『拾遺愚草員外』にそれぞれ見え、この二冊は『六家集』に収められ、元禄以前から刊本があると、幸島宗意『倭板書籍考』(元禄十五(1702)年,長澤規矩也等『日本書目大成3』(汲古書院, 1979年)で書かれている。しかし、和歌史研究会編『私家集傳本書目』(明治書院, 1965)、慶応義塾大学附属研究所道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成1-3』(井上書房, 1962)、寛文十一(1671)年刊の『本朝書籍目録』・寛文七(1667)年刊の『日本書籍考』(長澤規矩也・阿部隆一編『日本書目大成1-2』(汲古書院, 1979))、荒井秀夫『江戸本屋出版記録(享保十二年~文化十二年)』(ゆまに書房, 1982)を調べる限りでは『六家集』の刊本情報が見出せない。そして、やっと「尾張藩御文庫御書目 文化十三年目録」(『尾張徳川家蔵書目録』(ゆまに書房, 1999))では『六家集』の刊本が確認できた。したがって、慈円の『拾玉集』と定家の『拾遺愚草員外』は、調べた限りでは文化十二(1815)年まで刊本より写本として流布しているのではないかと推測する。

34 本論では主に宮内庁書陵部・図書寮文庫が所蔵する『拾玉集』(貞和二(1345)年写本・五冊)に拠った。以下同じ。

35 前掲注(31)『『あら野』巻六、野水「詩題十六句」について』は、「添水」を中心に解釈した。

36 『はなひ草』において、「四月」の項目に衣替えと綿ぬきが取り上げられている。また『俳諧初学抄』(斎藤徳元著, 寛永十八(1640)年跋)では、「初夏」の項目に「綿ぬき」を提示し、「四月一日也」という説明がついている(尾形仿・小林祥次郎共編『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』(勉誠社, 1981))

踏まえた上で、定家の「たちかへるわが衣でのうすければ春より夏のかぜぞすゝしき」（『拾遺愚草員外』夏十首）³⁸における傍線部「衣替え」の意味を重ね、さらに「綿脱」という庶民的な生活に転じて表現している³⁹。

あるいは、次のような発句にも同じ趣向が見られる。

⑥ 白頭夜礼仏名経

仏名の礼に腰懐く白髪哉

「香火一炉灯一盞、白頭夜^ル礼^ス仏名経^ニ」⁴⁰とあるように、「白頭」は白髪の頭を意味するだけでなく、原詩はもともと経を礼する老僧を嘲戯けるものとして、「灯」の反射で燦然と輝く坊主頭のことも連想される。しかし、ここでは一句のみ引用しているため、断章取義によって白髪の老人が夜、『仏名経』を唱えている、もしくは仏名を礼拝していると解釈される⁴¹。この詩句に対して、「百首和歌」ではそれぞれ次のように詠んでいる。

香火一炉燈一盞 白頭夜礼仏名経

つもりゆくかしの雪も消えやせん三世の仏をおがむ光に

（慈円『拾玉集』「詠百首和歌」冬十首）

白頭夜礼仏名経

としふれば我くろかみも白糸のよるは仏の名をとなへつゝ

（定家『拾遺愚草員外』冬十首）

慈円の和歌では、白髪を老僧の頭に積もった雪と形容して、前世・現世・来世という三世の仏⁴²を拝む光によって罪が消えるだろうかと詠んだ。定家の和歌では、慈円と違い、老僧の姿がなくなり、年月が立つにつれ、黒髪が白糸のように変わり、夜は白糸を擦る（「擦る」は夜の掛詞）ように仏の名を唱えながら、と詠んだ。これに対して、野水の発句は、『仏名経』を礼拝するためで腰を抱くように見える白髪の老人のことを表現した⁴³。ここで、原詩、和歌、及び俳諧の詠み方を比較してみると、和歌は主に「同情」の

37 前掲注(23)『俳諧類船集』において、「松風」の項目に、「相国寺の鉢は聞も涼しき心ちせらる」という説明がなされている。

38 本論では主に早稲田大学図書館蔵本『拾遺愚草』（享禄2(1529)年、筒井順久写）に拠る。以下同じ。

39 前掲注(31)『「あら野」巻六、野水「詩題十六句」について』においては、和歌の「衣手」という表現が衣替えの意味をしていないと指摘しているが、定家の「たちかへる我が衣での」という表現はすでに「衣替え」を示唆していることから、定家の詠歌を踏まえていると推定できる。

40 前掲注(20)『白氏長慶集』卷三十五「戲^{スル}礼^ス佛^ノ名^ノ経^ニ」。

41 前掲注(22)『和漢朗詠集註』では、この詩句に対して、「一爐の香をたき、一盞の燈をかゝけて、白頭の老比丘の、夜な夜な仏名経を礼したるさま哀なる心也」と解釈した。

42 三世のそれぞれに現れる一切の仏。仏の総称。『拾遺愚草』「上・八五〇」「河竹のなびく葉風も年暮れて三世の仏の御名を聞くかな」（石田瑞磨『例文 仏教語大辞典』（小学館、1997））。

43 前掲注(31)『「あら野」巻六、野水「詩題十六句」について』において、仏名を『三劫三千諸仏名経』の唱えることと解釈し、野水が仏名会の様子を具体的に描いたこととし、「白髪」を主眼とすることから、原詩の感傷的な趣を活かしているとした。それに対して、本論では原詩がもともと含んだ戯れの意味を取り入れ

形式で詠まれていることが分かる。特に定家の和歌は原詩と不離不棄とあるように読み取れ、「白糸を撚りながら」絃を唱えている動作まで表現した。野水の発句は「腰懐く」という、漢詩でも和歌でも見られない表現によって、これまでの『仏名経』を唱えている様子に、伏拝している姿を付け加え、面白さを加味している。

このように、漢詩と和歌を踏まえつつ、漢詩文調や和文調から脱却し、俳諧文調として滑稽さに満ちて生まれ変わる趣向が、野水の句から見出せる。無論、野水が同情を用いる手法がこれにとどまらず、十三句目である次の例のように、俗世間の様態を表す俳諧独特の美意識を表現したものは見過ごせない。

⑦ 万物秋霜能懐色⁴⁴

白菊や素顔で見むを秋の霜

原詩では秋の霜が巧みに万物の色を破壊するように変えてしまうと詠んでいる⁴⁵。そして、「百首和歌」の同じ詩題を踏まえた和歌は、

万物秋霜能懐色

秋の色を冬のものにはなさじとてけふよりさきに霜のをきける

(慈円『拾玉集』「詠百首和歌」秋十六首⁴⁶)

万物秋霜能懐色

下草の時雨もそめぬ枯ばまで霜こそ秋の色はのこさね

(定家『拾遺愚草員外』秋十五首⁴⁷)

とあるように、いずれも秋の霜が秋の風情を払拭していることを詠んでいる。これに対し野水は、秋の風情を代表する白菊の素顔を見たいのに、秋の霜がそれを被ってもとの色ではなくなったと詠んでいる。

て、野水の発句に解釈を補足している。

44 前掲注(20)『白氏長慶集』巻十五「歳'晩'旅望」、原詩句は「万物'秋'霜能'壊'色⁷」である。

45 前掲注(22)『和漢朗詠集註』では、この詩句に対して、「萬づの物は、皆、秋の霜に依つて色を變ずる心也」と解釈した。

46 貞和二(1346)年成。前掲注(34)『私家集傳本書目』で整理した伝本、及び近世期の出版記録を調査した結果、前述したように近世初期は写本しか確認できない。一方、「万物秋霜能懐色」という詩句について、「懐」を使うテキストは主に版本『六家集』、石川一氏の蔵本、及び宮内庁書陵部御書本である(文集百首研究会『文集百首全釈』(風間書房、2007))。それで、本論では主に宮内庁書陵部・図書寮文庫が所蔵する(貞和二(1345)年写本・五冊)に拠ることとした。

47 建保六(1218)年成。前掲注(34)『私家集傳本書目』で整理した伝本、及び近世期の出版記録を調査した結果、前述したように該当テキストは『拾玉集』と同じく近世初期に写本しか確認できない。そして、「万物秋霜能懐色」という詩句について、「懐」を使うテキストは主に版本『拾遺愚草員外雜歌』(刊行年不詳、国文学研究資料館蔵本)、早稲田大学図書館蔵の『拾遺愚草』(享禄二(1529)年、筒井順久写)及び『拾遺愚草員外雜歌』(半紙本一冊、早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇 第18巻『中世歌書集(二)』、1989)である(文集百首研究会『文集百首全釈』(風間書房、2007))。それで、本論では主に早稲田大学図書館蔵本『拾遺愚草』(享禄二(1529)年、筒井順久写)に拠ることとした。

そこで、これらの作品を対照してみると、俳諧は和歌や漢詩と同調で表現しながらも、白菊も霜も白色系統であることから、秋の霜は白菊を萎れさせてその色を破壊したのではなく、素顔で見たかった白菊を秋の霜が花びらに薄い化粧をした⁴⁸、と展開している。野水が二重の意味をかけたことは興味深く味わえる。この発句から、野水が漢詩の題を借りる方法を模倣しつつ、和歌のように漢詩の心情や景色を再表現するのみではなく、漢詩と和歌の情景にはあてはまらない、世俗の様相を詠む俳諧独自の美意識を鮮明に作用させたことに気が付く。

したがって、野水の句は、「文集百首」の和歌を踏まえることによって漢詩と和歌とを重ねているため、『みなし栗』が編集された天和期に見られる漢詩文調に対し、その表現はより叙景的・叙事的であると見て取れる。その上、漢詩や和歌に調和するような同情の傾向を、どの発句においても俳諧の情景に置き換え、漢詩や和歌の殻を打ち破って、身近に感じる面白みに満ち溢れた俳諧に首尾良く変身を遂げている。

(二) 越人の詩題俳諧

一方、同じく尾張俳壇の一員であり、かつ『あら野』で活躍した越人は、野水と同様に漢詩を題とした俳諧の新しい詠み方を模索している。

その選句に関して、池澤氏が「越人風雅」⁴⁹で指摘したように、越人が詠んだこの五句も、定家の『拾遺愚草』の「二見浦百首」⁵⁰で中国の五夫人を題とした和歌を念頭に置いたが、野水のように定家らの詩句を継続して使用するのではなく、定家の引用した『白氏文集』の詩文から新たに他の詩句を抜き出す一方、『錦繡段』というテキストからも交替して引用することで、定家と異なる夫人像を取り上げていた。

まず、定家の和歌を念頭に置いた詩題俳諧を検討する。「李夫人」を詩題とした漢詩では、武帝が反魂香の煙の中に李夫人の姿を求めるところまでを描いた。これに対して、定家の和歌は、「李夫人」の題を引き継ぎ、「ほのかなる煙はたぐふ程もなしなれし雲みに立かへれども」と詠み、李夫人の魂が住み慣れた宮中に再び戻ってきたとはいえ、返魂香の薄い煙では、寄り添うことができない⁵¹と詠み、漢詩の吟詠と同調している。それに対して、越人は「魂在何許／香煙引到焚処」⁵²を題にし、「かげろふの抱つけばわがころも哉」と詠んだ。武帝が反魂香を焚いて、亡き李夫人の姿を求めるとい漢詩の内

48 前掲注(31)『『あら野』巻六、野水「詩題十六句」について』は、和歌で白菊をよく霜と紛れる例を取り上げ、白菊と白霜が区別できないという理解を示し、俳言の「素顔」を高く評価した上で、主に白霜が融けた白菊という意味に解釈している。白石梯三氏・上野洋三氏校注の『芭蕉七部集』も同じ。

49 前掲注(31)『近世文芸 研究と評論』77号。

50 前掲注(39)『拾遺愚草』。

51 「雲井」は天空、遠方、及び宮中、皇居などの意味で使われている。佐藤恒雄氏執筆『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、1999年)。

52 原文は「魂在^ル何^ク許^ニカ^ル／香^ノ煙^ニ引^レテ到^リ焚^ル処^ニ」とある。前掲注(20)『白氏長慶集』巻四「李夫人」に拠った。

容を表現しつつ、俳諧では、陽炎のような幻を抱きしめていると思っていたら、なんとただ自分の衣を抱いていたのだ、という驚愕を含んだ発想に切り替えている⁵³。

また、「長恨歌」を踏まえ、「楊貴妃」を題にした定家は、「みがきおく玉のすみかも袖ぬれて露と消にし野べぞかなしき」と詠み、楊貴妃が儂くなったことに着目した。それに対して越人は、帝王が道士を通して楊貴妃と再会する場面である「雲髻半偏新睡覺／花冠不整下堂」⁵⁴という詩句を題にして、「はる風に帯ゆるみたる寝貌哉」と詠む。すなわち、漢詩では、楊貴妃が雲のように乱れた髪も整えずに堂から降りてくる様子を表しているのに対して、越人は、春風の中に帯が緩んだままの楊貴妃の寝覚顔⁵⁵を主眼とした。いずれも定家と異なった視点をもって、漢詩の内容を独自に展開していることが分かる。

さらに、越人は『錦繍段』⁵⁶より「西施」と「王昭君」を題として詠んだ詩句を選出しており、詩題俳諧にいつもの関心を寄せている。

⑧ 西施

宮中拾得娥眉斧 不献吾君是愛君⁵⁷

花ながら植かへらるゝ牡丹かな

⑨ 王昭君

玉貌風沙藤画図⁵⁸

よの木にもまぎれぬ冬の柳哉

⑧の漢詩では、宮中に発見された美人の西施を自国の王に献上せず敵国に送ったのは王を思うためであるという。越人は「西子巧妝痕」⁵⁹を意味する牡丹によって、西施が他の所へ移植された牡丹のようだとした⁶⁰。そして、⑨の漢詩では王昭君の顔は砂漠の砂塵に汚れても、画工に書かれた肖像よりはるかに美しいという。越人の発句では、冬

53 前掲注(31)「越人風雅」において、この句は幻から目を覚めた達観の境地を意味しているかと指摘した。

54 原文は「雲ノ髻ツテ半偏コト新睡覺ノ髻タリ／花ノ冠不シテ整ヘ下リ堂ヨリ来レリ」とある。前掲注(20)『白氏長慶集』巻十二「長恨歌」に拠った。

55 前掲注(31)「越人風雅」は、越人の「寝顔」は寝起きの顔を意味しているとし、堀切実氏や上野洋三氏の指摘に賛同している。また「帯のゆるみ」は玄宗の寵愛を受けたのではなく、春風に吹かれたことから、悲哀を示唆していると指摘した。

56 天和二(1682)年刊、久富哲雄編『影印仮名つき錦繍段・三体詩・古文真宝』(クレス出版、1992年)に収録したものを参照した。

57 呂仲見「范蠡」「宮中拾得娥眉斧」/「不献吾君是愛君」。前掲注(57)『影印仮名つき錦繍段・三体詩・古文真宝』。

58 僧季潭「明妃曲」「玉貌風沙勝画図」。前掲注(57)『影印仮名つき錦繍段・三体詩・古文真宝』。

59 前掲注(23)『俳諧類船集』「巻一」「牡丹」項目を参照。

60 前掲注(31)「越人風雅」は、この句に関して花の王者である牡丹が移植されたようだと説明した上で、牡丹などの花卉栽培に没頭する趣味人への風刺を込めているという解釈も提示した。

になって葉が落ちてしまった柳⁶¹は余のようだが、木々に紛れない独特な美しさを持っているとした⁶²。

越人の詠んだ五句のうちの四句はすべて「かな」止めであることから、その漢詩を通して理解した美人像に対する詠嘆を示していることが分かる。また、⑧及び⑨の発句からわかるように、その美しさを新たに再表現することによって、漢詩の意味と通じ合った俳諧になり、漢詩の内容を訳しているような余韻も響かせている。

越人が中国の美人像を詠んだ漢詩に唱和する五句も、詩題や和歌の表現したものを踏まえつつ、面白さを根本とした「俳諧化」に努力する趣旨も無論貫いている。それに加え、越人は単に漢詩や和歌の意味を再表現し、もしくは俳諧で漢詩の内容を展開したのみならず、俳訳と見えるような傾向をも伴っている。よって、『あら野』に収められた詩題俳諧は、『みなし栗』と同様に漢詩に唱和し、同情とする詠み方もあるが、漢詩の内容を展開させる発想、かつ俳訳の芽吹きが見逃せない。

5 まとめ

これまで述べてきたように、当時の漢詩に唱和する文壇の流行を背景に、詩題俳諧の端緒を開いた芭蕉は最初、漢詩人の心境に唱和した上で、個人の心情を中心に表現してきた。そして、江戸蕉門が『みなし栗』でそれを実践し、さらに、尾張蕉門が『あら野』にて発展させていった。

『みなし栗』で詠まれた詩題俳諧は、俳諧の技法を多様に用いながら、周囲の景色や俳壇事象などを素材として取り入れる傾向が見られる。その後、芭蕉に俳諧の道標として評価された『あら野』では、漢詩句や、漢詩を題とした和歌そのものに唱和し、同情とするだけでなく、俳諧なりの美意識によって新たな趣向を創出し進展させる一方、俳諧に訳しているような試みも見出せる。つまり、この『みなし栗』から『あら野』へと至る過程を通して、漢詩を題とした発句を一段と開花させ、詩題俳諧における表現は漢詩の心情に呼応するものに終始せず、多彩で持続的な発展が進んでいったと見受けられる。

だが、詩題俳諧の存在が蕉門における意義を解明するには、『焦尾琴』や『庭竈集』に掲載された中国の詩人像を題とした発句を視野に入れる必要がある。これを今後の課題として、詩題俳諧の近世俳壇における位置づけを一層追究していきたいと考える。

付記 本稿は、「2016年度日本交流協会招聘活動」により、2016年6月~8月に行った現地調査で得られた資料に基づいて書かれたものです。同年12月17日に「2016年度日本語国際学術シンポジウム」(台北：輔仁大学)にて、原題「近世初期における詩題俳諧の発端—『みなし栗』から『あら野』へ—」をもって

61 前掲注(23)『俳諧類船集』「巻五」「四季」項目において、「柳は春めぐみ夏茂り秋ちりて冬はかれたつぞ」や、「巻四」「落葉」項目において「冬の柳」が提示される。

62 前掲注(31)「越人風雅」は、春の風情を残っている柳はほかの枯れ果てた木々とは違った趣があると解釈した。

口頭発表を行いました。席上、齋藤正志先生をはじめ、諸専門家や学者の方々からご教示を賜りました。また、本稿の執筆にあたっては、特に天野聡一先生及び公益財団法人 角川文化振興財団、杉下元明先生、鈴木重雄氏に貴重なご助言をいただくことができました。記して感謝の意を表したく存じます。さらに、査読の労を惜しまず貴重なご指摘をくださった本誌査読者の先生方にも心から深謝を申し上げます。なお、本稿における文責はすべて筆者に帰するものであることを申し添えます。貴重な資料の閲覧、引用を許可してくださった関係諸機関の方々に、この紙面を借りて、篤く御礼を申し上げます。

参考文献(時代順)

一、資料

- 慈円著(1345)『拾玉集』、東京：宮内庁書陵部・図書寮文庫蔵。JiEn(1345) *Shūgyoshū*. Tokyo: Library in Archives and Mausolea Department.
- 藤原定家著、筒井順久写(1529)『拾遺愚草』、東京：早稲田大学図書館蔵。Hujiwara Teika(1529) *Shūigusa*. Tokyo: Waseda University Library.
- 策彦・白(道澄)・紹巴等(1568)「永禄十一年十二月二十五日策彦・白等漢和聯句」、松宇文庫蔵(東京：国文学研究資料館マイクロ資料)Sakugen, etc. (1568) *1568, December 25, Sakugen, etc., Kannarenku*. Shōu Library. Tokyo: National Institute of Japanese Literature.
- 林永喜・応昌・久我敦通・林羅山・大圭等(1623)「元和九年三月永喜応昌等漢和聯句」、東京：国会図書館蔵。Hayashi Eiki, etc. (1623) *1623, March, Eiki, etc., Kannarenku*. Tokyo: National Diet Library.
- 野々口立圃著(1636)『はなひ草』(尾形侑・小林祥次郎共編(1981)『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』、東京：勉誠社。Nonoguchi Ryūho(1636) *Hanahigusa*. Ōgata Tsutomu, etc. (1981). *Kinsei Zenki Sajiki 13shu Honbun Shūsei & Sōgō Sakuin*. Tokyo: Benseisha.
- 斎藤徳元著(1640)『俳諧初学抄』(尾形侑・小林祥次郎共編(1981)『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』、東京：勉誠社。Saitō Tokugen(1640) *Haikai Shogaku Shō*. Ōgata Tsutomu, etc. (1981). *Kinsei Zenki Sajiki 13shu Honbun Shūsei & Sōgō Sakuin*. Tokyo: Benseisha.
- (宋)于濟・(宋)蔡正孫編(1646)『聯珠詩格』、東京：国文学研究資料館公開資料。Yú jì, etc. (1646) *Lián zhū shī gé*. Tokyo: National Institute of Japanese Literature.
- (唐)白居易作、(明)馬元調校(1657)『白氏長慶集』(長澤規矩也(1974)『和刻本漢詩集成 第九輯』、東京：汲古書院。Mǎ yuán diào, edition(1657) *Bái shī zhǎngqīng jí*. Nagazawa Kikuya(1974). *Wakokubon Kanshi Shūsei Vol.9*. Tokyo: kyūkoshojin.
- 季吟著(1671)『和漢朗詠集註』、架蔵本。Kigin(1671) *Wakan rōeishūchū*. Personal Library.
- 梅盛著(1677)『俳諧類船集』『日本文学Web図書館』、千葉県：「和歌&俳諧ライブラリー」。Baisei(1677) *Haikai Ruisenshū*. Japanese Literature Web Library, Chiba: Waka & Haikai Library.
- 芭蕉作(1681)「真跡懐紙」(井本農一・堀信夫校注(1970)『古典俳文学大系 第五卷 芭蕉集』「俳文編」、東京：集英社)。Bashō(1681) *Shinseki Kaishi*. Imoto Nōichi, etc. (1970). *Koten Haibungaku Taikai, Vol.5, Bashō Shū*. Haibunhen. Tokyo: Shūeisha.
- 池西言水編(1681)『東日記』(天理図書館綿屋文庫俳書集成編集委員会(1998)『談林俳書集 四』、東京：八木書店)。Ikenishi Gonsui(1681). *Higashi Nikki*. Tenri Library Wataya Bunko Haisho Shūsei Henshū linkai(1998). *Danrin Haishoshū, Vol.4*. Tokyo: Yagishoten.
- 桃青(芭蕉)編(1681)『俳諧次韻』(井本農一・堀信夫校注(1970)『古典俳文学大系 第五卷 芭蕉集』「連句編」、東京：集英社)。Tōsei(Bashō)(1681). *Haikai Jiin*. Imoto Nōichi, etc. (1970). *Koten Haibungaku Taikai, Vol.5, Bashō Shū*. Renkuhen. Tokyo: Shūeisha.
- 天隱龍澤編(1682)『錦繡段』(久富哲雄編(1992)『影印仮名つき錦繡段・三体詩・古文真宝』、東京：クレス出版)。

- Tenin Ryūtakū(1682). *Kinshūdan*. Hisatomi Tetuo(1992). *Eiin kanatsuki kinshūdan*. *Sandaishi*. *Kobunshinpō*. Tokyo : Kuresu shuppan.
- 其角編(1683)『みなし栗』(愛知 : 愛知県立大学図書館貴重書コレクション). Kikaku(1683) *Minashikuri*. Aichi : Aichi Prefectural University Library.
- 荷兮編(1689)『あら野』(愛知 : 愛知県立大学図書館貴重書コレクション). Kakei(1689) *Arano*. Aichi : Aichi Prefectural University Library.
- 幸島宗意著(1702)『倭板書籍考』(長沢規矩也, 阿部隆一編(1979)『日本書目大成 第3巻』, 東京 : 汲古書院). Kōjima Sōi(1702). *Wahanshōjakukō*. Nagazawa Kikuya, etc. (1979) *Nihon Shomoku Taisei*. Vol.3. Tokyo : Kyūkoshoin.
- 越人編(1728)『庭籠集』藤園堂文庫蔵(東京 : 国文学研究資料館マイクロ資料). Etujin(1728) *Niwakamadoshū*. Tōendō Library. Tokyo : National Institute of Japanese Literature.
- 如銚編(1756)『江府諸社 俳諧たま尽し』(加藤定彦・外村展子編(1997)『関東俳諧叢書 第十巻 江戸編②』, 東京 : 青裳堂書店)Nyosen(1756) *Ehushosha Haikaitamatukushi*. Katō Sadahiko, etc. (1997) *Kantō Haikai Soshō*. Vol.10. *Edohen*. Tokyo : Seishōdōshoten.
- 鍋島直藤・鍋島直郷・昌春等(1759)「宝暦九年十一月廿五日漢和聯句」, 東京 : 国文学研究資料館蔵. Nabejima Naohuji, etc. (1759) *1759, November 25, Kanwarenu*. Tokyo : National Institute of Japanese Literature.
- 秀実・鍋島直郷等(1734)「享保十九年十一月廿五日漢和聯句」, 東京 : 国文学研究資料館蔵. Hidezane, etc. (1734) *1734, November 25, kannarenku*. Tokyo : National Institute of Japanese Literature.
- 其角編(1743)『焦尾琴』, 愛知 : 愛知県立大学図書館貴重書コレクション. Kikaku(1743) *Shabikin*. Aichi : Aichi Prefectural University Library.
- 其角編(1758)「田舎之句合」, 松上文庫蔵(東京 : 国文学研究資料館紙焼資料). Kikaku(1758) *Inaka no Kuawase*. Shōu Library. Tokyo : National Institute of Japanese Literature.
- 麦水編(1776)『新みなし栗』「付みなし栗の訳」, 八戸市立図書館蔵(東京 : 国文学研究資料館公開資料). Bakusui (1776) *Shin Minashikuri*. Hugen Minashikuri no Yaku. Hachinohe Public Library, Tokyo : National Institute of Japanese Literature.
- 菊舎尼編(1812)『手折菊』, 「日本文学Web図書館」, 千葉県 : 「和歌&俳諧ライブラリー」. Kikushani(1812) *Taorigiku*. Japanese Literature Web Library. Chiba : Waka & Haikai Library.
- 尾張藩御文庫御書目(1830)『尾張藩御文庫御書目 文化十三年目録』, 名古屋市蓬左文庫監修(1999)『尾張徳川家蔵書目録』, 東京 : ゆまに書房. Catalogue of books in Owarihan Library(1830) *Catalogue of books in Owarihan Library*. 1816. Nagoya City Hōsa Library(1999). Catalogue of books in Owari Tokusenkei Library.

二、研究書

- 和歌史研究会編(1965)『私家集傳本書目』, 東京 : 明治書院. Wakashi Kenkyūkai(1965) *Shikashū Denpon Shomoku*. Tokyo : Meijiin Shoin.
- 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編(1962)『江戸時代書林出版書籍目録集成1-3』, 徳島 : 井上書房. KEIO Institute of Oriental Classics(1962) *Edojidai Shorin Shuppan Shoseki Mokuroku Shūsei*. Vol.1-3. Tokushima : Inoueshobō.
- 赤羽学(1961)『みなし栗 : 翻刻と研究』, 岡山 : 私家版. Akabane Manabu(1961) *Minashikuri : Honkoku & Kenkyū*. Okayama : Private Printing.
- 長澤規矩也(1979)『日本書目大成2』, 東京 : 汲古書院. Nagazawa Kikuya(1979) *Nihon Shomoku Taisei*. Vol.2. Tokyo : Kyūkoshoin.
- 森銚三等(1982)『随筆百花苑 第五巻』, 東京 : 中央公論社. Mori Sensō, etc.(1982) *Zuihitsuhyakkaen*. Vol.5. Tokyo : Chuōkōronsha.
- 荒井秀夫(1982)『江戸本屋出版記録(享保十二年~文化十二年)』, 東京 : ゆまに書房. Arai Hideo(1982) *Edo Honya Shuppan Kiroku(1727~1815)*. Tokyo : Yumanishobō.
- 白石梯三・上野洋三校注(1990)『芭蕉七部集』, 東京 : 岩波書店. Shiraiishi Teizō, etc. (1990) *Bashō Shichibushū*.

Tokyo: Iwanamishoten.

- 佐藤勝明(2006)『芭蕉と京都俳壇—蕉風胎動の延宝・天和期を考える—』, 東京: 八木書店. Sato Katsuaki(2006) *Bashō & Kyotohaidan: Shohū Taidō no Enpō/Tennaki wo kangaeru*. Tokyo: Yagishoten.
- 文集百首研究会(2007)『文集百首全釈』, 東京: 風間書房. Bunshūhyakushū Kenkyūkai(2007) *Bunshūhyakushū Zenshaku*. Tokyo: Kazamashobō.

三、論考

- 石川真弘(1992)「江戸俳壇—其角・嵐雪など—」(『講座元禄の文学第三巻 元禄文学の開花II—芭蕉と元禄の俳諧』, 東京: 勉誠社) Ishikawa Shinkō(1992) *Edohaidan: Kikaku/Ransetu. etc., Kōza Genroku no Bungaku, Vol.3: Genroku Bungaku no Kaika II: Bashō to Genroku no Haikai*. Tokyo: Benseisha.
- 石川八朗(1992)「『次韻』から『みなし栗』へ」(『講座元禄の文学第三巻 元禄文学の開花II—芭蕉と元禄の俳諧』, 東京: 勉誠社). Ishikawa Hachirō(1992) *Jiin kara Minashikuri he, Kōza Genroku no Bungaku, Vol.3: Genroku Bungaku no Kaika II: Bashō to Genroku no Haikai*. Tokyo: Benseisha.
- 高橋庄次(1973)「『あら野』をめぐる問題」(『文学』, 41), pp.29-51. 東京: 岩波書店. Takahashi Shōji(1973) 'Arano wo meguru Mondai' *Bungaku*, No.41, pp.29-51. Tokyo: Iwanamishoten.
- 池澤一郎(2008)「『あら野』巻六、野水「詩題十六句」について」(『近世文芸 研究と評論』, 75), pp.1-24. Ikezawa Ichirō(2008) 'Arano Vol.6, Yasui "Shidai 16 ku" nituite' *Kinseibungei: Kenkyū & Hyōron*, No.75, pp.1-24.
- 池澤一郎(2009)「発句を書くことの喜び—『文集百首』と野水の「詩題十六句」—」(『国文学研究』, 157), pp.34-42. Ikezawa Ichirō(2009) 'Hokku wo Kaku Koto no Yorokobi: Bunshūhyakushū & Yasui no "Shidai 16 ku"' *Kokubungakukenyū*, No.157, pp.34-42.
- 池澤一郎(2009)「越人風雅」(『近世文芸 研究と評論』, 77), pp.61-71. 東京: 早稲田大学文学部. Ikezawa Ichirō(2009) 'Etujin Huga' *Kinseibungei: Kenkyū & Hyōron*, No.77, pp.61-71.
- 高野実貴雄(2009)「趣向と叙景の俳諧表現史IV」, (『浦和論叢』, 41), pp.105-134. Takano Mikio(2009) 'Shukō & Jyokei no Haikai Hyōgenshi IV' *Urawaronsō*, No.41, pp.105-134.
- 稲葉有祐(2007)「『みなしぐり』再考—方法としての追和と唱和—」(『立教大学日本文学』, 98), pp.59-71. Inaba Yusuke(2007) 'Minashikuri saikō: Hōho toshite no Tsuiwa & Shōwa' *Rikkyōdaigaku Nihonbungaku*, No.98, pp.59-71.

四、辞典

- 井本農一・尾形ゆ・島津忠夫・大岡信合編(1995)『俳文学大辞典』, 東京: 角川書店. Imoto Nōichi, etc. (1995) *Haibungaku Daijiten*. Tokyo: Kadokawashoten.
- 石田瑞麿(1997)『例文 仏教語大辞典』, 東京: 小学館. Ishida Mizumaro(1997) *Reibun: Bukkyōgo Daijiten*. Tokyo: Shōgakusan.
- 久保田淳・馬場あき子編(1997)『歌ことば歌枕大辞典』, 東京: 角川書店. Kubota Jun, etc.(1997) *Utakotoba Utamakura Daijiten*. Tokyo: Kadokawashoten.
- 『和歌文学大辞典』編集委員会編(2014)『和歌文学大辞典』, 日本文学Web図書館, 千葉県: 「和歌&俳諧ライブラリー」. Wakabungaku Daijiten, EC(2014) *Wakabungaku Daijiten*. Japanese Literature Web Library, Chiba: Waka & Haikai Library.

黄佳慧 Chiahui HUANG

(台湾) 文藻外国語大学日本語学科専攻助理教授。日本近世俳諧文学、和漢比較文学。「『青ひさご』における漢詩句を題とする発句について」(『俳文学報 会報』52号, 2018.10, pp.52-63)、「近世前期における俳訳流行の発端: 越人編『鶴尾冠』・『庭菴集』に収録した「詩題俳諧」を中心に」(『日本語日本文学』第44輯, 2015.11, pp.26-47)など。

『跨境 / 日本語文学研究』編集委員会規定

第1条 編集委員会の委員の構成

1. 本委員会は、『跨境 / 日本語文学研究』(以下、本誌とする)の分野に関する専門的かつ国際的の研究者合計10~12名により構成する。
2. 編集委員の任期は2年であり、再任は可能である。
3. 新編集委員の選出は、編集委員の推薦と編集委員の2/3以上の同意を得て行う。

第2条 編集委員会の任務

1. 本委員会は、本誌の編集・刊行を目的とし、そのために必要なすべての業務を行う。

第3条 査読委員の構成

1. 編集委員の推薦により、本誌の分野に関する専門的かつ国際的な研究者により構成する。
2. 査読委員の任期は2年であり、再任は可能である。

第4条 査読委員の任務

1. 査読委員は編集委員会の委嘱を受け、編集委員と共に投稿論文を審査する。

第5条 編集委員会事務局および発行者の位置

1. 編集委員会事務局は高麗大学校GLOBAL日本研究院に置く。

2. 発行者は高麗大学校GLOBAL日本研究院長とする。

第6条 編集委員長の仕事

1. 編集委員長は編集委員の中から互選により選ばれる。
2. 編集委員長は本誌の委員会の諸業務を総括する。
3. 編集委員長の任期は2年であり、一回に限って再任は可能である。

第7条 編集委員会の日程と方式

1. 編集委員会は編集委員長が招集する。
2. 編集委員が各地域に居住している状況を考慮し、編集業務はオンライン上で進行する。
3. 第1次定期編集会議(1月中)において論文の内容によって査読委員を定め、第2次定期編集会議(査読締め切り2週間以内)で論文掲載可否を決定する。

第8条 編集委員会事務局と幹事の任務

1. 編集委員長は編集委員会事務局内に編集委員1名を幹事として任命する。
2. 幹事は編集委員会にて決定された審査論文の送付や審査結果の取りまとめなど、本誌出版に関連する諸連絡業務を担当する。

『跨境 / 日本語文学研究』査読規定

第1条 論文投稿の締め切りと雑誌の刊行

1. 本雑誌は年2回、6月30日と12月30日に刊行する。
2. 投稿は随時可能であり、毎年1月15日と7月15日を締め切りとする。

第2条 査読の日程

1. 編集委員会は、以下の日程で査読に関する業務を行う。
 - ①査読依頼：1月31日と7月31日以前
 - ②査読締め切り：2月20日と8月20日
 - ③論文投稿者への査読結果通知：査読締め切り後2週間以内
 - ④論文投稿者修正原稿締め切り：4月10日と10月10日

第3条 査読の手順

1. 編集委員会は投稿論文の分野などを考慮し、編集委員1名ないし2名、査読委員1名ないし2名、合計2名に論文審査を依頼する。
2. 査読担当者は、投稿者に対して客観的な立場をとり得る者とする。
3. 査読担当者は審査書書式に基づき公正な審査を行う。
4. 査読担当者は投稿者に非公開とする。
5. 編集委員会は査読担当者の審査書にもとづき、当該論文の採否を決定する。
6. 査読担当者2名の判断が分かれた場合などは、編集委員長により第3の査読担当者を定めることができる。

第4条 査読料の支払

1. 編集委員会は、所定の論文査読料を査読委員に支給する。
2. 査読料の領収については、審査書の返送の際にその事実をメールの中で確認する。

第5条 査読の基準

1. 以下のいずれかに該当する論文であることが審査において重視される。
 - ①当該領域の研究史及び研究状況をふまえ、その領域で新しい地平を開拓する論文であること。
 - ②新しい研究領域・新しい研究方法を切り開く問題提起的な論文であること。
 - ③研究上有益な資料を発掘し、意味づけている論文であること。
 - ④研究の発展に貢献すると見なせる論文であること。
2. 査読は「論文の目的と動機の明確性」、「論文の創意・独自性」、「内容の充実度」、「参考文献の活用度および結果の学界貢献度」、「論旨展開の整合性、用語の統一性、および投稿規定との適合度」の5つの項目について、A(優れている)、B(問題ない)、C(問題がある)を判断し、必要に応じてコメントを付す。

第6条 査読結果

1. 掲載とその通知にあたっては、以下の通り対応する。
 - A：掲載(ただし字句・表現などの修正を求める場合がある)。
 - B：修正後掲載(再審査を行う)。
 - C：次号以降への再投稿。
 - D：不掲載。

第7条 論文掲載予定証明書

1. 論文掲載予定証明書は、掲載が決定された論文に対し編集委員会の確認を経て、編集委員長の名義で発行する。

『跨境 / 日本語文学研究』論文投稿規定

第1条 編集の趣意

本誌は、日本語で書かれた文学に関して、越境的に取り組む学術誌である。近代以降を中心とし、国、地域、民族、ジェンダー、ジャンル、時代区分など、私たちの社会を分割する境界線を跨いで思考する意欲的論考を、広く掲載する。

分析の対象や分野に制限はないが、「跨境Border Crossings」「<日本語>文学」という発想・事象・歴史を扱う、先鋭的な論考を歓迎する。

原稿の種別は「論文」と「エッセイ(跨境の言葉)」「資料紹介」とし、いずれも未発表のものに限る。

第2条 投稿の資格

「論文」「エッセイ(跨境の言葉)」「資料紹介」、いずれの欄においても投稿者の資格は問わない。

第3条 投稿料

論文投稿に際して投稿料は徴収しない。

第4条 使用言語

日本語及び英語で作成することを原則とする。

第5条 原稿等の提出

1. 跨境の論文投稿システム (<http://submit.bcjl.org/>) に、以下を提出する。なお、原稿などは一切返却しない。

- ①原稿
- ②英語による200ワードの抄録(要旨)
- ③英語(日本語)によるキーワード(5つ)
- ④英文タイトルと英文筆者名
- ⑤投稿者の連絡先など(氏名(漢字)、所属、役職、専攻分野・郵便番号、住所、電話番号[FAX]、E-mail)
- ⑥略歴(大学以降の学歴。略歴は査読担当者の公正な選定のためにのみ使用する)

第6条 雑誌の電子公開

1. 本誌に掲載された論文の著作権は、発行所の高麗大学校グローバル日本研究院に属し、論文の出版権利は著作者が保持する。(2018年12月改正)
2. 本誌に掲載された論考は、原則としてすべて電子公開する。投稿者は特別な事由のないかぎり、これに同意するものとする。
3. 引用する図版等については、投稿までに投稿者が電子公開の許諾を得ておくこと。

『跨境 / 日本語文学研究』原稿作成要領

1. 原稿の使用言語・分量・形式

- ① 使用言語は原則として日本語、あるいは英語とする。
- ② 研究論文は、12,000-20,000字程度とする。この文字数には、本文、注、図表、参考文献を含むものとする。
- ③ 原則として横書きとする。論文末尾に執筆者の氏名、所属等を「(しめい/所属等)」の形式で記載すること。氏名はひらがなで書く。
- ④ 原則として手書き原稿は受け付けない。MS-word等で作成し提出する。
- ⑤ 論文に関する著作権や所有権に関する問題は、全て論文投稿者の責任において 対処することとする。

2. 抄録およびキーワード

- ① 抄録作成言語：英語の抄録を論文の最初のページに載せる。
- ② 分量：200words
- ③ キーワード：検索の便宜のために、キーワードを5単語内外の英語(日本語)で入れる。

3. 書式

- ① 全体に関して
 - ・ ページ番号を付す。
 - ・ 論文末に総文字数を書く。
 - ・ 西暦使用。元号を()に入れて付記は可。
 - ・ 新字旧かな使用(固有名詞も原則新字。詩は個人の判断で)
 - ・ 数字はアラビア数字(2014)
 - ・ セクション番号は アラビア数字のみ。点なし。 例：1 はじめに
 - ・ 書名など、欧文でイタリックにするところはイタリック体を使う。
 - ・ 読点は「、」を、句点は「。」を用いる。
 - ・ 文中にダッシュを使う場合は、2 字分のハイフンを用いる。ダッシュの前後にスペースを空けない。
 - ・ 各段落の頭は、1 字下げる。
- ② 引用文章に関して
 - ・ 引用文は、左側を2 字分下げる。右側はそのまま。
 - ・ 引用は「」。長い引用は、本文との間に一行あけ、インデント下げ。
 - ・ 本文中の引用は、末尾の句点をつけない。例：「———」と述べている。
 - ・ 引用中の略記は「引用引用引用(略)引用引用引用」
 - ・ 引用中の執筆者による補いは[]
 - ・ ルビを執筆者が補った場合は()内に入れる。 (ルビ) 卓球
 - ・ 引用中、誤字などをそのまま表記するときは ママ 棹球

③ 注記と引用文献の出し方に関して

- ・注はページごとの脚注にする。
- ・脚注において引用文献は次のように記述する。
書籍：著者「書名」(出版社, 1930), p.15.
著者「作品名」(『書名』出版社, 1930), p.15.
雑誌：著者「作品名」(『雑誌名』第1号, 1928.1).
新聞：『紙名』(1925.3.4, 朝刊).
- ・引用論文などのタイトルは「主題——副題——」と表記
- ・引用文献においては、読点「、」と句点は「。」を用いない。日本語文献でも、「カンマ「、」とピリオド「.」を用いる。
- ・欧文新聞を引用する場合は、下記のように日、月、年の順にする。
New York Times, 25 Mar, 1995
- ・翻訳文献を参照した場合、外国人の名前は原語で表す。
- ・インターネットからの文献・資料も、他の文献・資料と同様に引用文献リストに含める。表記は、「著者名(機関名). 文書発行年月日. 文書タイトル. 発行機関名. アクセス年月日<アドレス>」の順に記す。長いアドレスは、スラッシュの後で行を変えることができる。原稿作成例示を参照のこと。

④ カッコの使い方

- ・作品タイトルは「」
- ・雑誌新聞名は『』

⑤ 図に関して

- ・図の番号の示し方。括弧などを原則として使用しない。図 1
- ・図のキャプションは横書き。数字は半角アラビック

4. 参考文献

- ① 本文と注で引用あるいは言及した文献はすべて、一番後に[参考文献]のリストに載せる。逆に引用していない文献はリストに載せない。
- ② <筆者名(年), 論文名(または著作名), 掲載誌巻号, 発行先>の順に配列する。原稿作成例示を参照。
- ③ ローマ字以外の言語の参考文献は、必ずローマ字を併記する。
- ④ ローマ字は、<Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Cornell UP, 1981.> の形式で作成する。
- ⑤ 文献の配列：日本語文献、英語文献、中国語または韓国語文献の順で、筆者名を基準に各言語のアルファベット順に従う。また、文献・新聞・インターネット・インタビュー・放送の順に記す。
- ⑥ 参考文献リストの各項目はすべて左側に寄せて書く。
- ⑦ 参考文献リストにおいては、読点「、」と句点は「。」を用いない。日本語文献でも、「カンマ「、」とピリオド「.」を用いる。

5. 別刷り

論文が掲載された筆者に学術誌2部を贈呈する。別刷りは筆者の申請を受け製作し費用は筆者が負担する。

『跨境 / 日本語文学研究』原稿作成例示

日本文学研究の論題と方法

日文跨境

korealee@hanmail.net

【ABSTRACTS】

The purposes of this thesis is to discuss

【Keywords】: Yasunari Kawabata(川端康成), Nobel Prize(ノーベル賞), Naturalism(自然主義), Koreans in Japan (在日コリアン), Japanese-Language Literature(日本語文学)

1 はじめに

本論文は現代の日本語文学研究の方法について.....

2 日本文学研究の成果と現在

1. 日本語文学研究の概観
2. 日本語文学研究の現在

3 新しい日本語文学研究の論題と方法

4 おわりに

本論では.....

【参考文献】

本の場合

- 大城徹三(1998) 『日本移民発祥の地コルドバ—アルゼンチン・コルドバ州日本人百十年史』, ブエノスアイレス市:らぶらた報知社. Oshiro, Tetsuzo *Nihon imin hasshonochi Cordoba: Argentine Cordobashu Nihonjin Hyakunenshi* Buenos Aires: La Plata Hochisha.
- 森田芳夫(1987) 『韓国における国語・国史教育—朝鮮王朝期・日本統治期・解放後—』, 東京:原書房.

跨境 / 日本語文学研究 Vol.7

Border Crossings : The Journal of Japanese-Language Literature Studies Vol.7

初版印刷 2018. 12. 20.

初版発行 2018. 12. 30.

編集 東アジアと同時代日本語文学フォーラム × 高麗大学校GLOBAL日本研究院

発行人 徐承元

発行処 高麗大学校GLOBAL日本研究院

Seoul市 城北區 仁村路108 青山MK文化館

Tel. 82-2-3290-2592 Fax, 82-2-3290-2538

<https://www.bcjil.org>

印刷・製作 図書出版 亦楽

Seoul市 瑞草區 東光路 46街 6-6 文昌Bldg. 2F

Tel. 82-2-3409-2058 Fax, 82-2-3409-2059

E-mail youkrack@hanmail.net

定価 25,000won

ISSN 2383-5222